



図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2007.October No.163



新企画

美術家と本

- | | | | |
|-----|---|---|---|
| 1 | 美術家と本(1)
ルーとヴォラール あるいは「美術家の本」 図書館長 後藤 新治 | 5 | 知らないと損をする！
レポート・論文作成法
レポートとは何か？ 法学部 法律学科 講師 大下 英希 |
| 2 | 研究ノートから[新企画]
「源氏絵」を読む 人間科学部 児童教育学科 教授 古田 雅憲
ブラウジングルーム[新企画]
塵も積もれば 文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 真下 弘子 | 6 | 使ってみようシリーズ(7)
学術雑誌コーナー(2階) その2 図書情報課 相田 英美子 |
| 3-4 | 世界の図書館 北欧編
フィンランド国立図書館(ヘルシンキ大学) 法学部 法律学科 准教授 遠藤 美奈
ストックホルム大学図書館 商学部 経営学科 教授 藤岡 豊 | 7 | 蔵書ギャラリー no.3
レニングラード写本:ファクシミリ版 神学部 神学科 教授 小林 洋一 |

美術家 と本

1



写真1:自宅のアトリエでテーブルの上に画布を置いて制作するルオー。ここから数多くの道化師やキリストが生まれた。[参考文献4]



写真2:自らの画廊で自著『ユビュおやじの再生』の出版パンフレットを手取るヴォラール。[参考文献7]

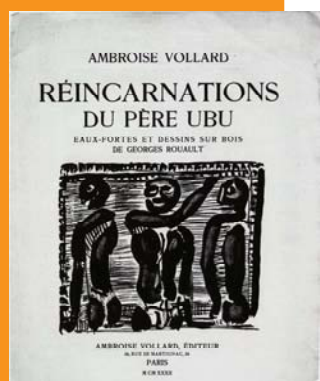


写真3:ヴォラールのテキストにルオーが銅版画と木版原画を描いた『ユビュおやじの再生』(ヴォラール出版、1932年)の表紙。モンヴァル紙に印刷されたプランタン活字のタイトル、その下はルオーの原画に基づきオペルが彫り、ジュールが刷った木口木版画。[参考文献8]

ルオーとヴォラール あるいは「美術家の本」

図書館長 後藤 新治

これから4回にわたり「美術家と本」と題し、本をめぐる画家や彫刻家、詩人、画商などのお話をしたいと思います。古代ローマ以来「詩は絵のごとく」あるいは「絵は黙せる詩、詩は語る絵」などと形容され、文学と絵画の親密な関係がしばしば指摘されてきました。19世紀前半のロマン主義による挿絵の流行は、作家と画家の間にこれまでにない緊張感を生み出し、テキストとイメージに新たな関係を打ち立てました。さらに世紀末から20世紀初にかけての写真製版による印刷技術の革新、「オリジナル版画」estampe originaleと「美術家の本」livres d'artistesの登場、もはや読むことのできないオブジェとしての本の出現などが、「本」という媒体をアートの領域へと飛躍的に押し上げます。電子メディアという実体のない「本」のことがかりが話題となる昨今、印刷物としての「本」の形態とその価値にあらためて注目してみたいと思います。

第1回目はフランスの画家ジョルジュ・ルオー(1871-1958) [写真1]と、彼の専属画商アンブローズ・ヴォラール(1866-1939) [写真2]に登場願いました。19世紀末まで「版画」といえば一般に職業的な版画家(彫り師)が精緻に版刻した名画の複製版画のことを指していました。これに対し、印象派やポスト印象派などの、いわば版画家としては素人の画家が自らの主題に基づいて描き、彫った石版画や銅版画などを「オリジナル版画」と称し、版画集として売り出した画商の一人がヴォラールです。このベンチャービジネスもはじめて成功したわけではありません。しかし「画家＝版画家」peintre-graveurという当時としては斬新な考え方が今日では何の違和感もなく受け入れられているのは彼の功績です。

さて「美術家の本」ですが、将来性を見込まれた画家の手になる「オリジナル版画」の入った、古典あるいは現代作家の挿絵本のことです。ヴォラールは作家と画家の選択に腐心し、どの場面を描くかは画家に任せたものの、彫り師と刷り師の確保に努め、用紙や活字、印刷にいたるまで細心の注意を怠りませんでした。特筆すべきは「美術家の本」のイメージがテキストに従属したものから、テキストそのものを刺激する存在へと変わっていったことです。

しかしこのような「美術家の本」のあらたな試みも「オリジナル版画」同様、当初愛書家たちの間では不興を買い興行的には失敗でした。なぜなら愛書家にとって、挿絵とはテキストの活字と同じ凸版以外には考えられず、職業的な版画家にしか彫れない木口木版画(凸版)こそが正統な技法でした。石版画(平版)や銅版画(凹版)では

受け入れがたかったのです。だがヴォラールは愛書家たちにも配慮しつつ、ひたすら自らの時が来るのを待ち続けました。

一方のルオーはヴォラールのもとで八つの「美術家の本」を手がけ、ヴォラール生前中にそのうちの三つを完成させました。最初のものがヴォラール自身のテキストに挿絵を入れた『ユビュおやじの再生』(1932) [写真3]で、最後がフランスの作家アンドレ・シュアレスとともに制作した『受難』(1939)です。とりわけ『受難』の制作に際し、シュアレスはルオーの刷り上がった銅版画を見ながらテキストを新たに書きすすめて行きました。これが通常の挿絵とは逆のプロセスであることは言うまでもありません。

ヴォラールは『ユビュおやじの再生』について、次のように回想しています。「私は出版に際してあらゆる障害にぶつかった。まずルオーのデッサンに調和する活字を見出さなければならなかった。色々試みた末、プランタンに決めた。今度は紙の選択と木版の印刷が残った。作品は一部分ヴィダロンのヴェラム紙に、一部分は彫刻家アリスト・マヨールに負うべき、あの見事なモンヴァルのレイド紙に印刷された。(中略)木版、とくに『再生』の大きな木版の印刷上の困難は、最少量のインクをつけ、それに最大限の圧力を加えて刷り得る機械を手に入れることであった。」そこで刷り師のジュール父子は、電動と手動をうまく組み合わせ、微細な線まで完璧に刷り上がるプレス機をわざわざ考案したと言います。

芸術家の才能の粋を集めてできた豪華な「美術家の本」の背後には、全体を統括しながら細部にこだわる出版者の執念とともに、このような無名に近い職人たちの努力があったことがわかります。同時に、ここにはイメージとしての版画のみならず、テキストとしての活字そのものを可能な限り物質化し、触知性を持った存在に変えようとするヴォラールの潜在的な欲望のようなものを感じずにはられません。20世紀のオブジェとしての本はこうしてヴォラールによっても準備されたと考えそうです。

(国際文化学部 国際文化学科 教授)

<参考文献>

- 1) ジョルジュ・ルオー [画]; アンドレ・シュアレス詩篇『受難: パッション: 54の連作油絵とアンドレ・シュアレス12の詩篇』岩波書店、1975年(開架 723/5/46)
- 2) フランソワ・ジョヤン他(柳宗玄他訳)『ルオー全版画』(全2巻)岩波書店、1979年(開架 734/0/3-1~2)
- 3) アンブローズ・ヴォラール(小山敬三訳)『画商の想い出』美術公論社、1980年(開架4階 723/35/115)
- 4) 出光美術館編『ジョルジュ・ルオー: 出光美術館蔵品』(本編)平凡社、1990年(開架4階 723/35/112-1)
- 5) François Chapon, Le livre des livres de Rouault, Éditions André Sauret et Éditions Michèle Trinchel, 1992(開架 723/35/17,17B)
- 6) 『ルオー版画展 ユビュおやじの再生/ミセレーン』松下電工沙留ミュージアム、2004年(開架4階 706/9/111)
- 7) Rebecca A. Rabinow et al., Cézanne to Picasso: Ambroise Vollard, Patron of the Avant-Garde, The Metropolitan Museum of Art, New York, 2006.
- 8) Anne Roquebert et al., De Cézanne à Picasso, Chefs-d'œuvre de la galerie Vollard, Musée d'Orsay, 2007.

「源氏絵」を読む

人間科学部 児童教育学科 教授 古田 雅憲

五条界限の場末にしては小洒落た家だった。その切懸塀に咲く夕顔の花の、ほのかな白さに心惹かれた源氏は、一輪手折ってくるよう侍者に言いつけた。まさしくその時、奥から若い侍女が出てきたのだ。そして、「これに置いてお目にかけてください、蔓が伸びて扱いにくいでしょうから」と、白い扇を侍者に手渡したではないか。その屋の女主から託された扇だった。そこには、彼女のものとおぼしき美しい文字で歌が綴られていて…。

それが始まりだった。源氏は、素性も明かさぬ謎めいた「夕顔の女」に強く惹かれ、やがて逢い引きを重ねるようになる。図版はその場面「源氏物語・夕顔巻」冒頭を描いたもの。江戸中期、土佐派某が描いた石山寺蔵「源氏物語画帖」(本学図書館架蔵 注)の一葉である。物語本文によく従って描かれているが、その中にも、絵師が自らの表現を確かに刻んでいることを見逃してはならない。

たとえば侍女の衣装文様。本文は「黄なる生絹の単袴長く着なしたる」と述べるばかりで文様にまで筆を及ぼさない。が、絵師はそこに撫子の花文様を散らした。実に気の利いた意匠というべきである。無縁の人は知らず、源氏絵に見入るような数寄者ならばボンと膝打ち笑みを浮かべるに相違ない。なぜならその花文様こそ、「夕顔の女」の素性をほのめかしたと見えるから。

女の素性—それは、源氏とも親しい頭中将がかつてこよなく愛した

人。正妻方の怒りを恐れて秘かに姿を消した内気で控えめな女。後に源氏の前にただならぬ存在として現れる娘の母。そして何より、かつて「常夏の花」にたとえられたこと。

うちはらふ袖も露けき常夏に

嵐吹きそふ秋も来にけり(女)

咲きまじる花はいづれとわかねども

なほ常夏にしくものぞなき(頭中将)

山樵の垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露(女)

「常夏の花(私)」のこと、飽きておしまいになったのね」と恨む女に、「よその花に目移りなんて、常夏の花(貴方)だけだよ」と返す頭中将。さらに返して「常夏の花はともあれ、撫子の花(この子)だけは忘れないうで」と女。実は「常夏」とは撫子の花の異名でもあった。同じ花の名を男女にこと寄せては「常夏」と、また親子にこと寄せては「撫子」と言いかえた妙である。

絵師が侍女の衣装に描き添えた撫子(常夏)文は、その屋の主「夕顔の女」の過去をそれとほのめかす。その「遊び」こそ、読者に向けて発せられた彼なりの源氏理解の表れであり、そこに源氏享受史の一端を確かに垣間見ることできる。およそ多くの古典は、「源氏」ほどではないにせよ、このように絵と共に享受されてきた。そういう「描かれた物語」を読み解く作業を積み重ねることで、文化史の多元的な展開をたどってみたいと思っている。

注：中野幸一編集「源氏物語画帖」石山寺蔵：四百画面：勉誠出版、2005年（開架 721/2/22）



ブラウジングルーム

塵も積もれば

文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 真下 弘子



この夏はベートーヴェンのピアノ・ソナタを聴いて過ごした。「悲愴」や「熱情」などの激情的な告白に満ちた大作ではなく、明るく人なつこい小品14の2にずっと耳を傾けていた。「悲愴」と同時期の

1798年から99年にかけて作曲された、ベートーヴェンにはめずらしい長調のソナタで、その歌のようなスタイルが私は気に入っている。オペラの短いデュエットも組み込まれていて、何度も聴いていると、登場人物たちの訴えや懇願がまるで話し声のように聞こえてくるのだ。音楽が語る言葉というものがあんだ、と実感するのである。

音楽と言葉という異なる2つの次元について考えながら、『梁塵秘抄』(注)を手にとってページを繰り、愛唱している歌をひとつ、ふたつちずさんでみると、今度は言葉が音楽を奏でているような思いにとらわれる。両者のかつての幸福な均衡関係を感じるのだ。『梁塵秘抄』は教科書の文学史に必ず出てくるほどよく知られた、後白河法皇の手に成る平安後期の今様集、つまり時のやり歌を集めたものである。古代中

国の虞公と韓娥という2人の美声の持ち主がうたうと、その響きで梁の上の塵が舞い上がり、3日も落ちてこなかったという故事にもつく書名が示すとおり、この書物に記されている言葉は、声に出してうたわれるために生まれてきたものたちである。

この今様という、和歌とはちょっと違う歌謡形式を私が知ったのは高校時代である。古文の授業で『平家物語』の祇王の条にある「仏も昔は凡夫なり…」という歌を読み、思いの直截さを生き生きと歌うその律動性に魅了され、声楽としての文学のもつ「梁塵」の力に引っぱられてこの撰集へと導かれた私は、たちまち愛読者となってしまったのである。

「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子どもの声聞けば わが身さへこそゆるがるれ」—この歌が鼓を伴奏にどのような旋律でうたわれていたのか、今では知る由もないが、七・五音四句のリズミカルな詞をつぶやいてみるだけで、「読む」ことが「歌う」という身をゆるがす行為へとつながっていくことが直感できる。

アレクサンドリアの昔から「知の集積場」として存在し機能してきた図書館。この堅い箱の中で読むことに疲れたら、そつと本の声に耳を澄ませてみよう。ここにある夥しい数の書物の上に積もった塵や埃を舞い飛ばすような、妙なる調べが聞こえてくるかもしれない。

注：白田基五郎他校注・訳「神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集」小学館、2000年（開架4階 918/0/9-42）

世界の図書館

〔 北欧編 〕



フィンランド国立図書館 (ヘルシンキ大学)

The National Library of Finland (University of Helsinki): Unioninkatu 36 Helsinki, Finland
<http://www.nationallibrary.fi/index.html>

法学部 法律学科 准教授 遠藤 美奈

ヘルシンキ大学は1640年に設立されたフィンランドでもっとも古い大学である。今日、ヘルシンキ市内の4キャンパスに神学・法学・医学・人文科学・自然科学・社会科学・行動科学・農林学・獣医学・生命科学・薬学の11学部があり、スタッフ7,700人、学生38,800人を擁する国内最大規模の大学でもある。同大学の図書館機構は、各キャンパス・学部・学科の付設図書館を含む大学図書館群と、国立図書館の2つから構成されている。これらのうち、歴史的にも学術的にも国内でもっとも重要であり、かつ、私が留学中にいちばん長い時間を過ごしたのが国立図書館であった。

1845年に完成した国立図書館の建物は、ベルリンとサンクト・ペテルブルグで活動したドイツ人建築家C. L. エンゲルの設計によるもので、同じくエンゲルの手になる元老院(現在は内閣と財務省が入っている)、大学の中央棟、大聖堂とともにヘルシンキの中心広場である元老院広場を囲み、調和のとれた帝政様式の景観をもたらしている。ヘルシンキはフィンランドがスウェーデンからロシアの統治下(1809年から1917年の独立まで)に入ってから新たに建設された首都であり、大学もまた、その設立の地である旧首都トゥルクの大火(1827年)で灰燼に帰してのち、ヘルシンキに移転してきた。ヘルシンキ大学が「帝国アレクサンドル大学」と呼ばれていた時代に決定された現・国立図書館ファサードのデザインは、時のロシア皇帝ニコライ一世その人が、エンゲルの用意した三案の中から最も壮麗なものを選んだとされている。

この図書館は大学の機関でありながら、ナショナル・ライブラリー—日本でいえば国立国会図書館—としての機能を有している。つまり、国の文化財産としての出版物を収集・保存し、学生だけでなく国民全体の用に供する役割を担っているのである。フィンランドではこの図書館に、国内で出版・流通したすべての出版物が納本されている。フィンランドがスウェーデン王国の一地方であった時代の1707年に出された王令で、出版物は王国内の各大学に一部ずつ寄贈が

義務付けられたが、そうして蓄積されたトゥルク時代の大学の蔵書は大火でほとんど焼失してしまい、貸出中だったために難を逃れた文献のみが現在も保管されている。そしてフィンランドのロシアへの割譲以後は、ロシア帝国内のすべての出版物を納本される権利が与えられたため、フィンランドが独立する1917年までに収集されたロシア語およびロシア帝国内で用いられていた各言語による文献は、世界でも有数のコレクションとなっている。歴史は図書館の蔵書にもまた、刻まれるものなのだといえよう。

図書館の正面扉を開けてロビーで荷物を預け、館内に入ると、まずは天井画の美しいキューボラ・ホールと呼ばれる空間に導かれる。その左右には同じく丸天井の南北閲覧室があり、奥へ進むと1907年に増築された円形書庫がある。キューボラ・ホールと閲覧室は天井まで吹き抜けになっていて、まさに私が必要とした法学・政治学に関する雑誌やロシア時代から現在までの国会議事録がぎっしり詰まった内壁に沿って、幅1.5メートルくらいの細い廊下が2階と3階の高さにぐるりと巡らされている。同じ文献は、大学の法学部棟と棟続きの法学部図書館にも所蔵されていたが、時間の許す限り、足はどうしても国立図書館に向いた。閲覧室の細い廊下のあちこちに置かれた椅子や板を渡しただけの机に腰を落ち着け、時間の止まったような空気の中で資料を探索するのが好きであった。地下にある小さなコーヒESHOPは、気分転換や待ち合わせに使った。1個



〔キューボラ・ホール。中央扉の奥は閲覧室。〕

売りのオレオ・ビスケットをクリームのとこで2枚に割ったものを「貧者のおやつ」と称し、それと紅茶一杯で留学生仲間とえらくねばったものである。夏はロビーのロッカーに勉強道具を入れたままバスで海に行き、泳いで帰ってくる不屈きな学生にもなった。国立図書館は、現在でもヘルシンキを訪ねると必ず立ち寄り場所である。名前を記載するだけで、入館には何の手続きもいらない。フィンランドに行くことがあったら、ぜひ足を運んでそこに息づく歴史を感じ、その雰囲気味わってみてほしい。

(写真: フィンランド国立図書館提供)



〔フィンランド国立図書館（ヘルシンキ大学）〕



〔ストックホルム大学図書館〕

ストックホルム大学図書館 Stockholm University Library: SE-106 91 Stockholm, Sweden <http://www.sub.su.se/startasok.aspx>

商学部 経営学科 教授 藤岡 豊

ストックホルム大学はスウェーデンの首都ストックホルムに1878年に設立された国立大学で、スウェーデンはいうに及ばず、ヨーロッパからも高い評価を受けている大学のひとつである。キャンパスはストックホルム市北部にある。森と湖に囲まれてこの上なく美しく、そこにただで心が癒される。私は2004年8月から2005年8月にかけて同大学大学院経営学研究科に客員研究員として滞在し、今回の紹介文を執筆するにあたり2年ぶりに同大学と同大学図書館を訪れることができた。

2006年度の年次報告書によれば、ストックホルム大学には約39,000人の学生が在籍しており、その内訳は社会科学専攻が36%、人文科学が27.3%、法学専攻が12.4%、自然科学専攻が11.7%となっている。驚くべきは25歳以上の学生が実に57%も在籍しており、年齢を問わずたくさんの人々が学んでいることである。男女比は4対6で、女性がたくさん在学している。院生も約1,900人在籍しており、ここでも男女比は45対55と女性が多くなっている。

ストックホルム大学といえば、毎年12月初旬にノーベル賞受賞者の記念講演が開催されることでも有名である。物理学賞・化学賞・経済学賞の各受賞者は、同大学の講堂（Aura Maguna）において英語で記念講演を行う。柴昌俊氏（物理学賞受賞者）と田中耕一氏（化学賞受賞者）も2002年にここで記念講演を行ったことが記憶に新しい。記念講演は市民に無料で開放されており、私も2004年の経済学賞（アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞）の記念講演を生で聴く機会に恵まれた。研究者にとって最高の栄誉のひとつであるノーベル賞の記念講演を生で聴く機会を得られたことは、私にとって生涯忘れられない思い出であり、研究者としての自覚を促すまたとない機会になった。

ストックホルム大学図書館はそんな同大学の研究と教育を支

える重要な情報供給機関であり、毎年170万人の利用者を誇るスウェーデン屈指の図書館である。同図書館にはMain Libraryに加えて、Asia Library, Chemical Library, Library of the Institute of Latin American Studies, Mathematics Library, Virtual Library - School of Businessなど多くの分館があり、学外でもスウェーデン出版協会（the Swedish Publishers Association）と書籍市場調査で協力関係を築いている。

同図書館で図書を借りる場合には、図書館入口で借りたい図書の書籍情報をコンピューターで調べる。開架図書の場合は直接書架まで借りに行き、閉架図書の場合はカウンターに貸出の請求をしに行く。もし目的の図書や論文が同図書館に所蔵されていないければ、所定の手続きを経て、国内はもとより国外の他の図書館からも取り寄せることができる。図書の貸出と予約、貸出の更新、学習センターのコンピューターの使用予約などは、すべて図書館カード（学生はキャンパスカード）を通じて電子的に管理されており、図書館からの連絡もすべてEメールで受け取ることになっている。

同図書館の内部には、インフォメーション、指定図書エリア、読書室、コンピューターエリア、ヨーロッパ文書エリア、研究室、会議室、複写室などが、いかにも北欧らしく白を基調としてゆったりと配置されている。学生はその静かで穏やかな空間の中で熱心に勉強に励んでいる。私もここでこの紹介文を書いていると、静寂の中で勉強を許されることのありがたさを感じずにはいられなかった。このような精神的な幸福感を感じさせてくれる同図書館にスウェーデンの成熟さと知的水準の高さを垣間見たというのは、果たして言いすぎだろうか。



〔閲覧室。木製の机に白い電気スタンドが設置されている。〕

レポートとは何か？

皆さんはすでに講義等でレポートを書いたことがあるでしょう。しかし、中には感想文になってしまっているものや、ひどいものだとインターネット上のテキストを単にコピーしただけのものを見ることがあります。そこで、正しいレポートを作成する上で気をつけることを考えてみましょう。

1

全ての文書は形から 書式を整えよう

レポートを出すときにまず気をつけてほしいのは書式です。手書きかワープロか、用紙のサイズは？綴じ方は？引用の仕方は？レポートが課される際に書式についての指定があるはずです。これをしっかり守って作成しましょう。形式が整っていないというだけで評価が低くなる、あるいは、受け取ってもらえないといったことが起きてしまうこともあります。

2

ピントがずれていませんか？ 課題と内容の整合性

レポートを書く時は課題をしっかりと理解しましょう。何を当たり前のことをと思うかもしれませんが、意外にこれが出来ていない人が多いのです。どれだけ一生懸命作っても、ピントのずれたレポートは評価されません。

教員がレポートを課す際には必ず意図があります。また膨大な情報量の中から必要なものを探し出すためにも、自分が何を書かなければならないのかを正確に理解することが必要です。レポートは文献を探したり、中身を書く前から始まっています。課題を色々な角度からしっかり考えられれば、レポートの8割方はできているといえるのです。

また、実際にレポートを書き始めると、つい筆が滑って違う方向に行ってしまう、結局何が言いたいかわからなくなることがあります。そのような場合でも事前にしっかり考えておけば、レポートを修正することが可能になります。

3

自分の意見を述べる前に レポートの本質

レポートとは「報告」という意味です。レポートでは第一に課題をめぐる問題状況を調査・整理しそれを分かりやすく伝えるということが求められます。なぜそれをレポートしなければならないのか、問題の本質はどこにあるのかを明らかにして初めて自分の意見を述べるのできるのです。そのためには多くの文献を読まなければなりません。

ここで役に立つのが「MAGAZINEPLUS」です。論文だけでなく、週刊誌などの雑誌記事も検索結果に出てくるので、その課題をより広い視野から検討することができます。また、図書館には情報のプロが揃っています。図書館をどれだけ有効に利用できるかがレポートの出来に大きく関わっています。

4

剽窃は最大の禁じ手 引用の仕方を覚えよう

しっかり文献を集めることが出来れば、それを整理していくだけです。ここで注意して欲しいのが、自分の意見を述べなければならないと思うばかりに、他人の意見を自分のものであるかのように書いてしまうことです。これを「剽窃」といい、絶対にやってはいけません。他人の意見に賛同することは悪いことではありません。大事なことは「なぜあなたがその意見に賛同するのか」ということなのです。

剽窃を避けるためには、他人の意見を区別し、出典を示すなどの引用の仕方をしっかり覚えることが重要です。各分野にはそれぞれ引用の仕方がありますので、それをきちんと身につけてください(法学部の場合は演習資料集に引用の仕方が載っています)。

5

ネットとうまく付き合おう ネット利用の功罪

課題を見て、まずキーワードを検索画面に打ち込む人も多いのではありませんか？確かにネット上の情報は手軽で有用です。特にその課題を考えるきっかけとしては最適かもしれません。しかし、ネット上の情報の全てが使えるわけではありません。「誰が」「いつ」「どの意見を参考に」「その意見を述べたのか」が分からないものは原則として使用することは出来ません。これらの要素を全て満たすネット上の情報は実は本当に少ないのです。

最近のレポートで目に付くのがネット上のテキストをコピーして作るという手法です。この手法は先ほどの剽窃という意味でも、文献を調査・整理し報告するという意味でも、レポートとは呼べません。しかも、この手法で書かれたレポートはすぐに分かります。同じレポートがいくつも出てきますし、中身を見ても語句の使い方や論理の違うものが並べられているからです(最近ではレポートとネット上のテキストを照合するプログラムまで出ています)。発覚を避けるために、切り貼りのものの論理の整合性や語調を整える作業をするくらいなら、自分で調べたものを整理して書いた方がよほど楽なように思うのですが…。もちろんこのようなレポートが評価されないことはいうまでもありません。

以上、レポートについて書いてきましたが、多くの情報を形式を守って整理するという作業は皆さんの今後にきつと役立つと思います。

大学生への「おすすめツール」

図書館ホームページ → 学術ポータル →
MAGAZINEPLUS

週刊誌などの雑誌を含めて検索結果が出てくるので、
課題を色々な視点から検討することができる。



MAGAZINEPLUS トップページ

『学術雑誌コーナー(2階) その2』

前回(162号,6p)に引き続き、今回は社会福祉分野の雑誌について紹介します。

社会福祉分野

【紹介者】

賀戸 一郎先生

現在2階の雑誌コーナーには、社会福祉関係の専門雑誌・一般雑誌を、大きく分けて6分野、31種類、専門新聞2種類を常設しています。

学生一人ひとりの興味・関心や必要性の高い分野(対象)や専門事項(制度・サービス・政策、支援方法・技術など)から自由に選択して活用してください。

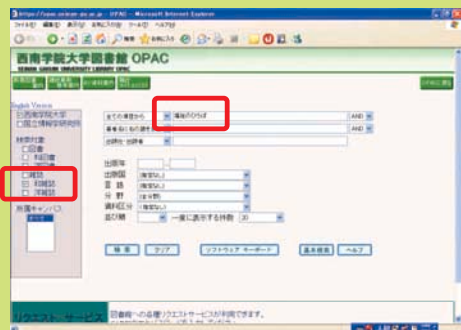
分野名	内容	タイトル数
①社会福祉総合	社会福祉に関する総合的内容の掲載	2
②社会福祉全般	子ども、障がい者、高齢者、地域等に関する制度・政策、実践とそれらに関連した情報の掲載	7
③ボランティア	ボランティア・市民活動に関する掲載	2
④介護福祉	介護福祉に関する理論、実践、関連情報等の掲載	5
⑤福祉関係の学術研究	国内外の社会保障・社会福祉の制度・政策、実践等に関する研究論文の掲載	7
⑥保健・医療・福祉	精神医療、精神保健・福祉、リハビリテーション、スポーツ医学等に関する理論、実践、関連情報の掲載	8
⑦専門情報	保健・福祉に関する新聞・切抜き集	2

※タイトル、内容は図書館ホームページをご覧ください。 <http://www.seinan-gu.ac.jp/library/index.html>



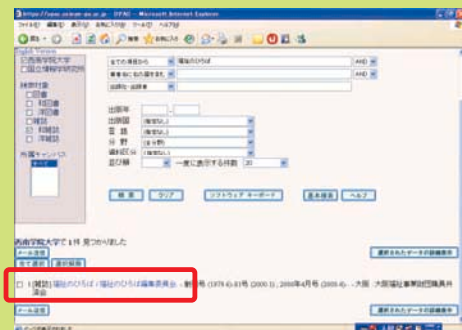
各分野にそれぞれの専門的な雑誌があること、みなさんがよく利用する2階にそのコーナーがあることを理解いただけたでしょうか。最後に、OPACから学術雑誌コーナーにある雑誌についての情報を確認する方法を紹介します。

1



【検索対象】の「和雑誌」にチェックをつけ、キーワードに雑誌名を入力して検索ボタンを押します。

2



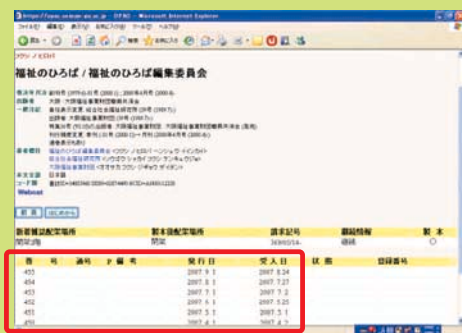
検索結果から見たいものを選び、青く反転している文字の部分をクリックします。

3



画面右下の【新着雑誌配架場所】の「開架2階(=学術雑誌コーナー)」をクリックします。

4



現在、何号(発行日、受入日[図書館に届いた日])が学術雑誌コーナーにあるかわかります。

The Leningrad Codex : A Facsimile Edition

『レニングラード写本:ファクシミリ版』

William B. Eerdmans Publishing Company /
Brill Academic Publishers, 1998年[大学院
193/1/128 禁帯出]



カーペット・ページ:これは裏表紙にも採用されているもので、中央のダビデの星の中にヘブライ語で、「私はシムエル・ベン・ヤアコブであり、私を書き、そして母音記号をつけた…」と署名が記されています。



旧約聖書の最初のページ、創世記の1章1節—26節。側欄にマソラ学者の注記が見られます。



わが大学図書館は、三巻本のレニングラード写本(エルサレムのマコル社版、1971年)も所蔵しています。上からトーラー(「律法」)、ネビイーム(「預言者」)、ケトビーム(「諸書」)の各書。(注2)

聖書の3分の2を占める旧約聖書の原典はヘブライ語(一部アラム語)で書かれています(新約聖書はギリシア語)。そのため、旧約聖書は「ヘブライ語聖書」とも呼ばれます。『聖書新共同訳』(1987年)の旧約聖書は、Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS) というヘブライ語聖書を底本とする翻訳です。このヘブライ語聖書(BHS)の元になっているものが、ここで紹介する「レニングラード写本B19A」(1008/9年)と呼ばれる写本です。旧約聖書は、大小様々な39書より構成されていますが、レニングラード写本は、旧約聖書全書を完備する現存最古の写本として知られています。大学博物館展示のアレppo写本はより古いのですが(930年頃?)、欠けが多く完全本ではありません。それ故に、レニングラード写本は、今日、旧約聖書にとって最も重要な写本であると言ってよいと思います。

わが大学図書館は、このレニングラード写本のファクシミリ版(注1)を所蔵しています。この写本は、羊皮紙に黒インクで書かれ、491フォリオ(葉)からなっています。本書の巻末には、美しい色彩のカーペット・ページ(中世のユダヤ教装飾美術の幾何学模様カーペットに似ていることから、そう呼ばれる)も収録されています。本書の表紙に見られるものは、そのカーペット・ページの一つであり、中央にヘブライ語で、「主のトーラーの全巻」と記されています(トーラーは、「律法」、「教示」を意味するヘブライ語)。

この写本は、ユダヤ人共同体が栄えていたエジプトの首都カイロで、1008/9年に、シムエル・ベン・ヤアコブによって、写本家の中で最も有名な家系、ベン・アシェル家系に属する写本

から書写されたものです(アレppo写本もこの家系に属する)。

レニングラード写本が、どのような経路にてか、その詳細は不明ですが、本ファクシミリ版序の解説によれば、写本の収集家であったユダヤ人実業家、アブラハム・フィルコヴィッチの手に渡り、1863年に、当時のセント・ペテルスブルグ帝国図書館(現ロシア国立図書館)に売られ、以来、そこに保管され今日に至っています。写本に付されている「B19A」とは、この写本があった書棚の整理番号です。

20世紀最大の考古学的発見と称される死海写本を参照すれば、一目瞭然ですが、ヘブライ語写本は古くは子音だけで書写されていました。しかし、7世紀に、写本の専門家であったマソラ学者と呼ばれる人々が、写本の正確な発音確保のため、この子音写本に母音記号とアクセント記号を導入しました。レニングラード写本にも、この母音記号とアクセント記号が付されています。それだけでなく、その欄外には、聖書中の特例的語形や語の連結頻度を数え上げた注記が付されています。聖書本文に誤りが混入されることがないようにとの工夫です。

レニングラード写本が古代から高い精度で書写されて来た伝承本文であることは、例えば、大学博物館で展示されている死海写本の一つ、イザヤ書巻物の完全本(前2世紀)とレニングラード写本(1008/9年)イザヤ書の対照照合からも確認されています。

注1:大学博物館でも常設展示

注2:Pentateuch, Prophets and Hagiographa : Codex Leningrad, B 19[a] R.Ben Publishing Co. for Makor Publishing, 1970-1971年(閉架194/01456/L54p(1)~(3))

編集後記

「世界の図書館」では、最近インテリアや雑貨などで注目を集めている「北欧」の図書館を紹介しています。本文中や外観、内観の写真から、北欧の図書館の落ち着いた雰囲気が伝わってきたのではないのでしょうか。他にも、研究者の世界を垣間見ることができる記事や、レポートの書き方が分かる記事など、みなさんに読んでいただきたい記事ばかりです。この号を読んで、何か1つでも気になることを見つけたら、ぜひ図書館でそのことについて調べてみてください。小さな好奇心が情報収集のスキルアップにつながります。

(Y.O)

西南学院大学図書館報 No.163

2007(平成19)年10月26日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426